

わたしの生きてきた昭和9

親が残してくれた一生の荷物。それは眼の疾病であった。私の場合、むしろ目がはつきり見えて健康であった時期よりも病と闘っていた時代の方が長かったように思う。

まず就学前、母が、険しい浅間峠をわたしをせおつて八鹿の町にある眼科医院まで治療に行つたという話。今から考へると、うそのようであるが、あの母親なれば、まんざら作り話でもないような気がする。当時、出石には眼科の病院などなかつたのは確かである。母は、幼い私の目をよくしたい一心で、献身的であつたことは確かな事実である。

しかし、その母の方が、私の眼が治癒するより先に豊岡病院で死んでしまつた。母の発病とともに、私は、四年生時を丸一年休学して、福知山荒河の寺にいた叔父夫婦（のちの養父母）に預けられた。そして、そこから、福知山の武内眼科へ通院、手術、治療をした。母がいよいよ息を引き取るという時、私は、治療中の盲目であった。顔を近づけた私に、母は、お念佛の声を残しただけであった。

「弥陀成仏のこのかたは、今に十劫を経たまえり 法身の光輪きわもなく 世の盲冥を照らすなり」（親鸞「淨土和讃」）

盲目のわたしに、母は、この和讃を残して逝つたとわたしは、いまだも、思つてゐる。わたしが、盲目の間に、時代は大きく動いていた。大正末年に「普通選挙法」が始まると同時に、「治安維持法」が実施されている。民主主義と戦争とが同時進行で出発した時代である。それが、わたしの生まれた時代である。

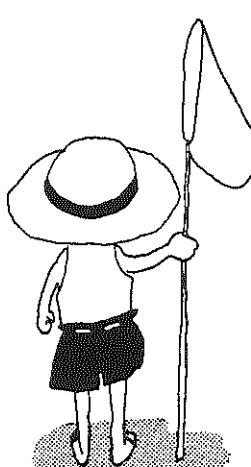
わたしの一年生の時の「読本」は、「はなはと まめ。ます みの かさ。からすがいます。すずめもいます。とりいがあります。ひのしがあります。」翌年、隣の女の子の「読本」は、「さ

いた さいた さくらがさいた。すすめ すすめ へいたい すすめ。」幼いながら、「ああ、時代は変わったんだ」と感じた。小学校の祝日には、校長先生が「教育勅語」を読み、学芸会には六年生がステージに整列して、「神武、スイゼイ・・」と天皇陛下の名前を高誦した。昭和

十一年には「2・26事件」が起きていたし、十二年には、日中戦争がもう始まつていた。「わが大君の初めたまいし」戦争が根こそぎ国民を戦争に動員していった。出石には、出兵兵士を送り出す「出石鉄道」ができ、歓喜の声と旗の波が響いた。

そんな中、十三年春、わたしは平安中学に入学した。三つ上の姉は、やはり京都の女專で学んでいた。最初、二人は、叔父叔母の家に下宿させてもらつていた。以後、そこを出て、東本願寺前、それから東山、渋谷の陶器屋さんのはなれへと下宿を変えながら通学した。その間の学生生活は、全くの戦争の中、学校の中では、配属将校が教育のすみずみまで、支配統制していた。何を習つたか、それさえもわたしの記憶には残っていない。また、大阪近郊の軍需工場や近江平野の稻刈りに使役され、空襲の中で若いいのちを散らした友も何人かいた。ブラスバンドのクラブ活動さえ、占領祝賀市民パレードなどに動員された。英語の学習はゼロ。何一つ学習した記憶がない。あんなひどい中学時代があつていいものなのかといまさらながら腹が立つ。思い出しても、悔恨のみである。学んだ中の中の人天、定聚に住し必ず滅度に至らずんば、正覚を取らじ」（真宗聖典十七頁）

今、未来のいのちのために何が問われて何をするべきなのか、ということ。過去を切り捨て、未来を見失うと「今ここ」を生きる私（人間）の消極的な課題も見いだせないでしよう。それは、同時に浄土の用らきを見失つた現実ではなく穢土を生きる姿です。「念佛は個人を直接的に救うのではなく、時代を社会を救うものである」とずっと聞いてまいりました。いよいよその念佛をもつて、過去も未来も包んだ現実の「今ここ」を生きるのだと、この法語は語りかけています。（正行寺住職 栗栖 寂人）



（文責 前住職）

法語カレンダー八月（HPより抜粋）

今を生きずに いつ生きる

どすん

前坊守が亡くなつたのは、平成三年の夏でした。今年の夏にも負けない暑さでした。同じ年の一月に、

私の祖母も、九十六歳で亡くなっています。私は、家族を見送る経験がなかつたので、祖母の死は不

時間というのは、過去—現在—未来という流れのようなものではなく、過去も未来も含んだ現在「今ここ」という時間である、ということを聞いていましたが、そのことがはつきりと感覚できずにいました。時間も空間も資本主義からいうと、空間はマーケット、時間は生産の時間である。つまり人間は、単なる時間ではなく資本主義の時間を生きている。人間が自己を考える時間を許さない。私自身、資本主義の時間にどっぷりとつかつてゐるから、最初に言つた本当の時間がわからなかつたのです。もしも、この言葉通りの「今ここ」だけを考えて生きるならば、これまでのさまざまな過ちを繰り返すのではないでしょうか。現に、過去と未来を見失つて経済、経済と推し進めてきた結果、いのちが生きられない大地を作つてしまつたのが、あの福島第一原発の事故だったのでしょうか。

本願文第十一願「たどい我、仏を得んに、國の中の人天、定聚に住し必ず滅度に至らずんば、正覚を取らじ」（真宗聖典十七頁）

二五回忌法要は、葬儀とは少し違いますが、やはり、ご門徒の皆さんにお世話を知らないととても家族だけではできません。だから「法要を終えた後が私の出番」と心しておりました。しかし、終わつてみれば、始まりから終わりまで、すべてご門徒の皆さん方が、それぞれの立場で的確に動いてくださり、私が頑張るところはありました。だから、終わつてからもまだ力が余つていて、その夜、親戚一同を神鍋のお風呂、香住の花火大会に案内したほどです（笑）

そして、やつと氣づきました。ご門徒の皆さんとの家族がみんなで力を合わせて、立派な法要を勤めてくれたと、前坊守はとびきりの笑顔で喜んでいたと思います。（文責 坊守）